

薬師寺東塔保存修理工事への奈文研の参画

奈良市西ノ京に所在する薬師寺の東塔では2009年度より10カ年の計画で保存修理事業がおこなわれています。奈良県教育委員会事務局文化財保存事務所が、薬師寺より受託し実施するものです。建造物研究室では、解体工事が始まった2012年度より毎年、研究員1名を派遣しています。

天平2年(730)に現在の地に建てられた東塔は、同じく奈良時代前半に建てられた平城宮第一次大極殿、大極殿院の復原にあたって、大いに参考にしています。その構造や意匠が、ほかの奈良時代の建築と大きく異なることから、藤原宮の南に位置する本薬師寺から移築したものか、否かという論争が、明治以来続いています。建造物の修理にあたっては、構造耐力を担保する必要がある、東塔では特に相輪や基壇にかんして、対策が求められており、美術工芸品、史跡といった文化財の保護の枠組みにも話はおよびます。

これらの難問解決のため、建造物研究室からの研究員派遣以外にも、多くの調査・研究に奈良文化財研究所が参画しています。埋蔵文化財センターの年代学研究室が年輪年代測定等を受託しているほか、同保存修復科学研究室、遺跡調査・技術研究室の各室が、相輪、塗装・彩色、三次元計測にかんして協力しています。これらは、いずれも新しい調査研究方法により東塔に迫るものです。木部の解体を終えた後には、都城発掘調査部が橿原考古学研究所と共同で基壇の発掘調査に臨みます。多分野の研究者が集まる奈文研だからこそ、可能な文化財の総合的な調査・研究といえるでしょう。

(都城発掘調査部 鈴木 智大)



解体がすすむ薬師寺東塔(二重裳階腰組)

記念座談会「いにしへの技術を語る—現代の「匠」と考古学者—」の開催

飛鳥資料館では、特別展ごとに記念講演会を開催しています。春期特別展「いにしへの匠たち—ものづくりからみた飛鳥時代—」では、少し趣向を変え、考古資料の復元製作でも著名な「現代の匠」と奈良文化財研究所の考古学者が古代の技術について語り合う記念座談会「いにしへの技術を語る—現代の「匠」と考古学者—」を、5月11日(日)に開催いたしました。陶芸作家の脇田宗孝先生(奈良教育大学名誉教授)、鍍金作家の小泉武寛先生(和銅寛)の2人の現代の匠を迎え、奈文研からは松村恵司所長、玉田芳英都城発掘調査部副部長が参加しました。

座談会では、脇田先生、小泉先生より暗文土師器・施釉陶器・富本銭等の復元品の製作工程や、それにまつわる様々な工夫やエピソードが紹介されました。また、脇田先生と小泉先生の対話から、燃料を用いて温度をコントロールする方法や土をあつかう技術が重要であること等、窯業技術と鑄造技術の共通点も浮かび上がりました。松村所長からは、飛鳥池工房遺跡出土の富本銭とその鋳型や未製品の特徴とともに、小泉先生と共同研究として実施した富本銭鑄造実験の意義が述べられました。さらに土師器の暗文の施文方法をめぐり、小石を用いて復元製作をおこなった脇田先生に対し、玉田副部長からは出土した暗文土師器にはヘラ状の工具で施文した痕跡があることが指摘される等、現代の匠と考古学者の製作技術に対する意見の違いもあきらかになりました。

現代の匠と考古学者の対話は2時間近くにもおよび、多くの参加者が熱い議論に耳を傾けました。

飛鳥資料館ではこれからも、展覧会とともに、講演会や様々なイベントの開催を予定しています。どうぞご期待ください。

(飛鳥資料館 丹羽 崇史)



記念座談会の様子